

「ごみしゅうしゅう車のしゅうたくん」を読んで

田崎 明

れが自分に向かったの行為だと理解して、体中に力が入りこわばっていたわが子の表情がとたんに笑顔になった。収集作業員に手を振りながら、「しゅうたくーん、ばいばーい」、と大きな声でわが子は言った。

ゴー、グワー、グシャグシャグシャグシャ、ゴー、グワー、グシャグシャグシャ

柳田先生、こんにちは。先日、私はわが子と一緒に「ご

私の手を握るわが子の、その小さな手に力が入る。目

みしゅうしゅう車のしゅうたくん」、という絵本を読みました。わが子にとって、家の車とは全く違った形の車

の前で、ものすごい音を立てながら回転板が回り、押し込み板がごみをつぶしていく。エンジンの音、機械の作

は興味の対象となるらしく人気者です。外を歩けばバス、

動音、ごみがつぶされ、圧縮される音、そして鼻に付く

消防車、救急車、パトカーやミキサー車など、たく

悪臭。今まで街の風景として、何気なく見ていたごみ収

さんの特殊車両を見付けてはいちいち私に教えてくれま

集車のごみを積んでいるのを、初めて意識して間近で見

す。ごみ収集車もその中の一つです。もちろんミニカー

たわが子の気持ち、握ったその小さな手の平から私に

もいろんなやつをいくつも持っています。

伝わって来る。やがて集積所からごみがなくなり、収集

しゅうたくんの絵本を読んだ後、わが子に、「お父さ

作業員が次の集積所に向かおうとした時に、見つめてい

んは毎日しゅうたくんに乗っているんだよ」と言うと、

るわが子に気が付き手を振ってくれた。一瞬遅れて、そ

「えっ、ほんとうに!?!」、とびっくりしていました。絵

本はあくまでも物語で架空の話であって、まさか絵本の
中の登場人物と自分の父親が同じことをしているとは、
幼いわが子には想像もできなかったのでしょう。

分別が正しくされていないごみを収集したせいで、し
ゆうたくんの調子が悪くなるシーンを読んでいると、わ
が子はとても悲しそうな顔をして、「しゆうたくん、か
わいそう」、とぼろぼろと涙をこぼして泣いてしまいま
した。自分がおなかをこわして苦しんだ時のことと重な
ったみたいです。それからはおやつを食べ終わったとき
など、「これはもえるごみ？これはもえないごみ？これ
はしげんごみ？」、とごみの分別について真剣に、しつ
こいくらいに私と妻に聞いて確かめるようになりました。

東日本大震災で被害を受けた仙台市から荒川区へ要

請があり、私はごみ収集車で被災地での支援に派遣され
ました。まだ幼いわが子は、父親がしばらく家にいなか

った、としか理解していないと思います。そのときの写
真をわが子に見せながら、「しゆうたくんはものすごく
がんばったんだよ」、と話しましたが、父親がごみ収集
車と一緒に写っている写真としか思っていないようでし
た。がれきの中、泥まみれになっている作業服姿の父親
とごみ収集車のしゆうたくん。将来、わが子はその写真
の意味を分かるときがきつと来ると思います。

初めて間近でごみ収集車がごみを収集しているのを
見て、その音、臭いに圧倒されていたわが子ですが、「し
ゆうたくん、がんばっていたね！」と笑顔で言いました。
その気持ちを忘れないで欲しい、と私はわが子の頭をな
でながらそう思いました。

【柳田邦男さんからのメッセージ】

子どもの目にはあまり映らない生活の陰になっているこ

み収集の現場の情景と父親のその仕事と、読み聞かせている絵本の内容とが、これほどまでに一体となって子どもの心にぐいぐいと響き渡る情景を記した文を、私は読んだことがない。

幼い子にとっては、大きなごみ収集車が、たくさんのビニール袋に入れられたごみを、まるで怪物が呑み込むように噛みこんでいく現場は、相当にすごい情景として映るだろう。一連のごみ処理の実際を絵本で紹介した『ごみしゅうじゅう車のしゅうたくん』を、わが子に読み聞かせたうえで、その現場を見せるという一般の親ならほとんどしないことを、あえてやったのは、田崎さん自身がその作業をするのを職業としてしているからだだろう。

しかも田崎さんはその仕事に誇りを持っていることが、文章の力強さから伝わっている。そして、わが子にたぐいごみ収集という仕事であっても、世の中には必要なのだし、そう

いう現場で働く人は黙々とまじめに働いているのだということを知らせようという熱意もこもっている。災害地でがれきやごみを収集するのは、復興への第一歩であり、不可欠の作業なのだ。しゅうたくんのがんばる作業、とりわけ震災での活動について、がんばっていたねという気持ちをいつまでも忘れないでいてほしいと願う田崎さんの思いに、私は深く感銘しました。すばらしいお父さんだ、と。